

蓮の歌題について 田辺愛子

— 堀河院御時百首和歌題詠覚書 —

堀河百首題は『堀河百首』成立以前の勅撰集、百首歌、歌合等にあまり取り上げられない特殊な歌題がいくつ含まれている。例えば、四季の歌題だけを見ても、呼子鳥・杜若・蓮・永室・泉・權花・炭竈・埋火等がみられる。その中の歌題の一つである蓮の歌題を取り上げ、『堀河百首』成立以前ではどのように詠まれ、また、どう意識していたかを時代的変遷に従って述べてみたい。そして、『堀河百首』に対する題詠意識を知るための一つの試みとして、蓮の歌題のもつ題意が如何なるものかを探ってみよう。その方法として、『堀河百首』の歌人達が歌題にどのように対応したかを分析し、検討を加えてみたい。なお、本文に群書類従本を使用した。

蓮がどのように時代的な推移を経ていくかを述べてみると、蓮は既に『万葉集』において題材として 3289・3826・3835・3837の四首が詠まれている。勅撰集において蓮の初出は『古今集』の夏の部立に

はちすの露を見て詠める 僧正遍昭

165はちす葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく

とあり、『古今集』の四季の部立の配列意識は自然現象を時間の流れに従っていることから、蓮を夏の主題としてとらえていたと考え

られる。165は『法華經』湧出品「不染世間法 如蓮花在水」を踏まえて詠まれている。『後撰集』（904・1089）は恋五・雑の部立に、『拾遺集』（1340・1344）は哀傷の部立に、『後拾遺集』（1153・1187）は雑五・釈教の部立にみえ、各々の部立に配される歌材として用いられ、各集の夏の部立には一首もみられない。『拾遺集』の哀傷の部立においては

左大臣時白川にて説教せさせ侍りけるに 実方朝臣

1340 左よりは露のいのちにもをしからず蓮の上の玉と契れば

市門にかきつけて侍ける 空也上人

1344 一たびも南無阿弥陀仏といふ人のはちすの上にのぼらぬはなしとあり、1344は極楽浄土を蓮に譬えて、浄土念仏の教えを歌意としている。この二首は哀傷歌というよりは釈教歌の要素をもった歌として扱うことが可能であろう。(1)

このように『堀河百首』成立以前の勅撰集では蓮の歌題は見当らず、歌材としては『拾遺集』以後、殊に釈教的性格を有する歌が現われることによって蓮そのものが仏教的性格をおびた歌材として用いられる傾向が顕著にみられる。当然ながら、釈教歌の発達と無関

係には考えられないだろう。

次に、私家集についてみると蓮は『伊勢集』（私家集大成中古Ⅰ 51、251・440）『源順集』（私家集大成中古Ⅰ 95、52・142）にみえるが、いずれも、恋歌や自然詠の歌材として見える。特に、『千里集』（私家集大成中古Ⅰ 23）『好忠集』（私家集大成中古Ⅰ 105）のみに蓮が夏季のものとして詠まれていることは注目させられる。『千里集』において蓮は夏の部立にみられ、部立構成（春21夏12秋22冬12風月11遊覧12述懐12詠懐10）は百首和歌と似ていて漢詩の句を歌題にして詠まれている。

蓮開水上紅

30 秋近くはちすひらくる水の上はくれなる深く色を見えける

『好忠集』においては六月のおはりの歌としてみえる。

177 なつのひの水のおもかくすはちすはにたよふ露の身をいかに
せん

それは蓮葉の上の露の定めなき我身に譬えて無常を歌意としている。そのような述懐的な詠法は好忠の特質の一つとされている。この二首はいずれも蓮を夏の終りの歌材として詠まれている。

また、釈教歌を含んでいる私家集である『實方朝臣集』（私家集大成中古Ⅰ 132、5・131・378）『和泉式部集』（私家集大成中古Ⅱ 1、446）『発心和歌集』（私家集大成中古Ⅱ 8、18・55）『大納言公任集』（私家集大成中古Ⅱ 12、271・462・463・486・516・517・518）『赤染衛門集』（私家集大成中古Ⅱ 14、242・243・260・378）において蓮は歌材として見えるが、それらほとんどは『法華経』の品題歌、法華経八講の歌や贈答歌である。その贈答歌は法師や尼との贈答、蓮に蠲を包みそれに添えて贈った歌とその返歌などである。いずれにしる蓮は

仏教の象徴として、仏教的色彩の濃い歌材とされている。雑駁であるが、やはり蓮の歌題はみえず、時代的推移からみてみると私家集においても勅撰集と同様に蓮の歌材としての質的変化が認められるであろう。

歌合においては蓮が歌題としている歌合を萩谷朴氏著『平安朝歌合大成』よりあげてみると次のようである。〔寛平五年九月以前〕皇太夫人班子女王歌合の夏歌廿番の中に

左

55 夏の夜の露なとめそ蓮葉のまことの玉となりしはてすはとあり、この歌合では蓮は独立した歌題ではなく、夏の歌題の歌として詠まれたのである。延喜六年右兵衛少尉貞文歌合においては「緑沼紅蓮浮」という句題で晩夏の歌題としてみえる。

左

6 緑沼に浮けたる蓮くれなるに水にぐるなり波たつなゆめ

右

7 くれなるの蓮うかへる緑沼に白波たてばこきませの花
この二度の歌合はいずれも平安朝初期に行なわれたものであり、しかも蓮は夏の季題とされているが、独立した歌題として歌合にはみられない。

次に、類題和歌集である『古今和歌六帖』においては第六帖に蓮がみえ、七首上げられている。その中には露や玉と共に詠まれた歌が多く、そのうち二首は蓮葉の香りが詠まれており、人事詠としてとらえられる。それらの蓮の歌はいずれも仏教的色彩は見うけられない。

『和漢朗詠集』においては蓮の歌題が夏の部立に分類されている。

て、蓮の歌題以外にも『堀河百首』と共通する歌題が数多く見出せる。『和漢朗詠集』の蓮には遍昭の『古今集』165の和歌が一首あり、漢詩が六編もひかれている。その中に『本朝麗藻』出典で『法華経』を引用して詠まれた蓮花の漢詩(180)が見出せる。このことから、蓮の歌題は仏教的要素と無関係ではないように思われる。

次に、堀河百首題を形成するに当って少なからず影響関係があったと思われる先行の百首歌をみてみると、蓮は四季の歌材としてみえず、わずかに『源順百首』杏冠歌に詠まれているのみである。

いささか概括的に触れたのみであるが以上のことから考えてみると、蓮の歌題がみえるのは『千里集』や延喜六年右兵衛少尉貞文歌合、『和漢朗詠集』『古今和歌六帖』、そのうち『古今和歌六帖』以外は夏の歌題としてみえる。『千里集』や延喜六年右兵衛少尉貞文歌合は「蓮開水上紅」「緑沼紅蓮浮」と漢詩文の歌題であり、それは平安朝初期の漢文隆盛の風潮の繁栄と考えられる。また、蓮の歌題は漢詩の影響を無視出来ないであろう。なかでも、蓮が夏に分類されてしかも独立した歌題としては『和漢朗詠集』しか見当らないことは注目するに価する。

歌材としての蓮は平安期の初期においては夏の季節の歌材とされていたが徐々に仏教思想の浸潤に拠って夏の歌材というよりはむしろ仏教的色彩を帯びた歌材として意識されている傾向があり、蓮は歌材としての変化を指摘することができる。

このように、あまり歌題に取り上げられなかった蓮が『堀河百首』では新しく夏の歌題に選定されているが『堀河百首』以前において独立した夏の歌題として『和漢朗詠集』以外にはみられないことや多数の共通歌題があることから、蓮を堀河百首題に選定するに際して

『和漢朗詠集』に典拠を求めているのではないかと考えられる。(2)

『堀河百首』では蓮の歌題に対してどのように対応しているかをみると、十六首のうち九首までが植物のもつ特質から池や水に関する歌語が用いられ、それらの歌語と共に露や玉が詠み込まれている。そのように詠まれた歌は『万葉集』が初見である。

3837ひさかたの雨も零らぬか蓮葉に濡れる水の玉に似たる見む殊に、『古今集』以来蓮は穢れない清浄の象徴とされ、蓮と共に露や玉の縁語を用いて詠むことが繰り返され、詠まれることに拠って一つのパターンとして定着されている。また、蓮の縁語の露や玉を懸詞として露の間(502)露の身(507)があり、玉から涙を連想する(504)という譬喩表現もあるが比較的目新しい修辭は見当らない。

具体的にいくつかの表現類型に分けてみると次のようである。

『法華経』湧出品「不染世間法 如蓮花在水」を発想の基盤として詠まれているものとしては

498こひちにもけれぬ花そあはれなる心のうちの蓮のみかは

508いかにしてにこれる水に生ながら蓮の花のけかれさるらん

500乙女子か姿の池のはちす葉は心きよけにも花さきにけり

510くれなるにふかくも匂ふ蓮哉池の心やきよくそむらむ

であり、498・508は『古今集』165の遍昭の歌を踏まえて詠まれている。500・510は蓮を穢れない清浄さの象徴として詠み、500は乙女子の姿と蓮の清らかさをオーバーラップさせるといふ構成が成されている。これらは『古今集』以来の伝統的発想を踏まえている。

次に、『法華経』の経文、仏教の用語や『法華経』の教えを詠み入れたものとしては

506 蓮葉はたへなる法の花なればまことの池の心にそさく
509 ふたつなき法のたとへにとるのみかはちすは人の心とそさく
512 諸人をすくふてふなる蓮葉の思ひしれとやうきしつむらん
とあり、506は妙法すなわち『法華經』の象徴として蓮をとらえてい
る。「たへなる法」は『赤染衛門集』（私家集大成中古II4）の法
華經品題歌にみえ、釈教歌との関係は無視できない。

序品

471 にしへのたへなる法をときければいまのひかりもさかことそ
みれ

509は『法華經』方便品第二「唯一乘法 無二無三」からの仏教用
語をひいて一乘真実の教えである『法華經』を詠み表わしたもので
ある。また、512は衆生濟度の教えが詠まれ、浮沈する蓮葉に拠って
この世の定めなさを歌意とし、蓮は『法華經』の象徴とされてい
る。506のまことの心や509の心は仏教の説く教えを悟る心であり、悟
りの境地である。蓮は悟りを開いた境地を象徴している。

蓮や蓮葉を極楽浄土の象徴として詠まれている歌は

501 つとめてはまつそ眺むる蓮葉をつるに我身のやとりと思へば
502 むらさめに玉なすほと露のまも蓮の上をわすれやはする
507 浮世にはきえなはきえぬ蓮葉にやとら露の身ともなりなん
の三首みえ、そのうち502、507は露に露の間、露の身を懸け、浮世に

浮くの懸詞や消えるという縁語が使われ、いずれも蓮を極楽浄土に
たとえて詠まれ、極楽往生の祈願を歌意としている。507は現世を穢
土と観し、その穢土から厭離しようとする現世否定的な浄土教の教
理が発想の基になっているように思える。また、『堀河百首』の無
常(155)や述懐(157)の歌題の中にも極楽浄土の象徴として蓮が詠

まれ、いずれも極楽往生の祈願を歌意としている歌が見出せる。

505はやことも小舟さしよせかのみゆる嶋根の蓮おらまくもおし

この一首は蓮を同様に極楽浄土に譬えている。嶋根は『万葉集』
所見の語句から摂取し、水面に浮かぶ嶋の蓮に小舟をむけるという
ことは西方浄土への思慕ととれる。また、『金葉集』雑例、俊頼の
歌にみられるように

障子のゑに、天王寺の西門にて法師の舟にのりて、西さまに

こぎはなれてゆくかたかけたる所をよめる

691 阿弥陀仏と唱ふる声をかぢにてやくるしき海をこぎはなるらん
天王寺の難波の海に面した西門は極楽浄土の入口であるとする信仰
からの発想で詠まれているとも推測できるであろう。これらは浄土
教的色彩を感知させられる。

次に十六首のうち三首が自然現象を写實的に叙景する詠法がみえ
る。

497 池水にうかふ蓮のうへにこそ人にしられぬ玉はなしけれ

499 水はしるはずの浮葉のしつますてうらやましくも生のほる哉

511 水きよみいけの蓮の花さかりこの世のものとみえすもある哉
499は自然現象を人事に比喻しており、511のように蓮の花盛りの風景
を極楽浄土と見違えたと詠んでいる。

蓮の歌で特徴的なものとしては503の仲実と504の俊頼の歌の二首を
上げることが出来る。

503 夏の池の蓮の露をみるからに心そことに涼しかりける

504 雨ふればはちすのうき葉にゐる玉のたえすこほるる我涙哉

503のように蓮を夏の季節のものとした歌は十六首中唯一で、蓮の
上の露に拠って夏の涼しさと同時に心の清浄さが詠まれている。こ

のように蓮を夏季のものとして詠まれている歌は前述のように平安朝前期にみえる傾向であり、『堀河百首』の蓮の歌において極めて特異な発想の歌と言えるだろう。

504は蓮を述懐的発想で詠まれているが俊頼は『堀河百首』において、この歌題以外にも述懐的発想にて詠まれた歌題が多数みえ、彼の詠法の特徴とされている。⁽⁵⁾また、この歌は『万葉集』3837の作意を踏襲しながら、俊頼独自の歌の世界を創り上げている。蓮を述懐的に詠んだ先例としては『好忠集』177を上げることができる。

177なつのひの水のおもかくす蓮葉にたたよ露の身をいかにせん
そして、彼の家集である『散木奇歌集』（私家集大成中古II 62）

において、蓮は夏部六月に364・365（504と同歌）の二首がみえ、いずれも題詠歌である。それはあくまでも蓮の歌題が夏季の歌題として意識されていたことを示し、釈教的発想の歌とは別のものとして意識していたと推察することが出来る。

蓮花よめる

364 玉水を蓮のわか葉にまきこめてこほすや花のひかりなるらん

以上のように、『堀河百首』において蓮は『古今集』165を踏えた伝統的な発想で詠まれた歌や仏教用語、主要な教理を詠んだものなど多岐に及んでいる。そして、単に、蓮が仏教の清浄さの象徴として意識されているのみでなく、例えば『法華経』や極楽浄土などのように仏教に関連した具体的なものの象徴として詠まれている。

また、ふたつなき法、妙法や衆生済度、穢土厭離などのように仏教の説く教理や仏教の専門用語やその知識などが詠まれている。そのように、蓮の歌題はかなり仏教的要素の強いものとして受け取られていたことは疑いのないことである。

そのような仏教用語やその内容、知識は平安朝中期に成立した『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』などにみえ、それ以来、仏教思想が貴族の生活意識に密着されてきている。『堀河百首』成立時期において浄土教が浸透しており、その主要な教理はかなり一般化されていたと思われる。

蓮において、仏教の教理や仏教用語を用いたり、それらの発想を基にして詠むことは釈教歌の影響と無関係には考えられないであろう。また、それらの歌の中には歌意からして岡崎知子氏の釈教歌の類別に従えば教理歌（一般に仏教を通じてその説くところの主要な教理、あるいは専門的な用語について知識的に内容趣旨を詠みあらわしたものと）考えられる歌を見出すことが出来るようである。⁽⁶⁾このようなことから、『堀河百首』において蓮は、仏教思想や宗教的世界の流入に拠って、夏季の歌題として意識することよりは、少なからず蓮に仏教的要素を題意にもった歌題として『堀河百首』の歌人達が意識していたととらえることが出来るであろう。

注1 岡崎知子氏「釈教歌考」『仏教文学研究(1)』（昭和38・1

・30）を参照。

注2 松野陽一氏「組題構成意識の確立と継承」『文学・語学』

70（昭和49・1）、橋本不美男、滝沢貞夫氏著『校本堀河院御

時百首和歌とその研究本文、研究篇』（昭和51・3）参照。

注3 上野理氏著『後拾遺集前後』（昭和51・4）第八章「堀

河百首と源俊頼」において、本来述懐とは無縁な十八題を

述懐歌に詠んでいると指摘されている。

注4 注1を参照。